

演習問題 2.23 2重添字に慣れるための問題

- (1) 命題 2.29 を示せ
- (2) 行列 $A = (a_{ij})$ に対し $B = (b_{ij})$ を $b_{ij} = a_{ji}$ で定めた時, B を A の転置行列といい $B = A^T$ と表す。この時 $(AB)^T = B^T A^T$ を示せ。

- (3) n 次行列 $A = \begin{pmatrix} 0 & 1 & 0 & \cdots & 0 \\ 0 & 0 & 1 & \cdots & 0 \\ \vdots & & & & \vdots \\ 0 & \cdots & & 0 & 1 \\ 0 & \cdots & & & 0 \end{pmatrix}$ に対し $A^n = O$ (零行列) が成立する事を示せ ($n = 3, 4$ 等で試算してみよ)。

- (4) n 次行列 $A = \begin{pmatrix} 0 & 0 & \cdots & 0 & 1 \\ 0 & 0 & \cdots & 1 & 0 \\ \vdots & & & \vdots & \\ 0 & 1 & \cdots & & 0 \\ 1 & \cdots & & & 0 \end{pmatrix}$ に対し A^n を計算せよ。 ($n = 2, 3, 4$ 等で試算してみよ)。

- (5) $i \geq j$ の時 $a_{ij} = 0$ であるような n 次行列 $A = (a_{ij})$ に対し $A^n = O$ (零行列) が成立する事を示せ ($n = 3, 4$ 等で試算してみよ)。

- (1) $A = \begin{pmatrix} a_{11} & \cdots & a_{1n} \\ \vdots & a_{ij} & \vdots \\ a_{m1} & \cdots & a_{mn} \end{pmatrix}$ という行列の表記法でも勿論証明はできるが, ここでは $A = (a_{ij})$ という表記法を用いる。 $A = (a_{ij}), B = (b_{ij}), C = (c_{ij})$ とおく。

- (1) 和の括弧と行列表示の括弧を区別すること! ここではそれを区別するため行列の括弧を黒で, 和の括弧を緑で書いておく。これより後の問題は自分で判断すること。

$$\begin{aligned} (A + B) + C &= ((a_{ij}) + (b_{ij})) + (c_{ij}) = (a_{ij} + b_{ij}) + (c_{ij}) \\ &= ((a_{ij} + b_{ij}) + c_{ij}) = (a_{ij} + (b_{ij} + c_{ij})) \\ &= (a_{ij}) + (b_{ij} + c_{ij}) = A + (B + C) \end{aligned}$$

- (2)

$$\begin{aligned} A + B &= (a_{ij}) + (b_{ij}) = (a_{ij} + b_{ij}) = (b_{ij} + a_{ij}) \\ &= (b_{ij}) + (a_{ij}) = B + A \end{aligned}$$

(3) 任意の i, j に対し $z_{ij} = 0$ とおくと $O = (z_{ij})$ なので

$$\begin{aligned} A + O &= (a_{ij}) + (z_{ij}) = (a_{ij} + z_{ij}) \\ &= (a_{ij}) = A \end{aligned}$$

(4)

$$\begin{aligned} (AB)C &= ((a_{ij})(b_{ij}))(c_{ij}) = \left(\sum_{k=1}^n a_{ik}b_{kj} \right) (c_{ij}) \\ &= \left(\sum_{\ell=1}^p \left(\sum_{k=1}^n a_{ik}b_{k\ell} \right) c_{\ell j} \right) = \left(\sum_{\ell=1}^p \sum_{k=1}^n a_{ik}b_{k\ell}c_{\ell j} \right) \\ &= \left(\sum_{k=1}^n \sum_{\ell=1}^p a_{ik}b_{k\ell}c_{\ell j} \right) = \left(\sum_{k=1}^n a_{ik} \sum_{\ell=1}^p b_{k\ell}c_{\ell j} \right) \\ &= (a_{ij}) \left(\sum_{\ell=1}^p b_{i\ell}c_{\ell j} \right) = A(BC) \end{aligned}$$

ただし A は (m, n) 行列, B は (n, p) 行列, C は (p, q) 行列として計算した。

(5)

$$\begin{aligned} AE &= (a_{ij})(\delta_{ij}) = \left(\sum_{s=1}^n a_{is}\delta_{sj} \right) \\ &= (a_{ij}) = A \\ EB &= (\delta_{ij})(b_{ij}) = \left(\sum_{s=1}^p \delta_{is}b_{sj} \right) \\ &= (b_{ij}) = B \end{aligned}$$

ただし δ_{ij} はクロネッカーのデルタであり, A は (m, n) 行列, B は (n, p) 行列として計算した。

(6)

$$\begin{aligned} A(B+C) &= (a_{ij})((b_{ij}) + (c_{ij})) = (a_{ij})(b_{ij} + c_{ij}) \\ &= \left(\sum_{s=1}^n a_{is}(b_{sj} + c_{sj}) \right) = \left(\sum_{s=1}^n a_{is}b_{sj} + \sum_{s=1}^n a_{is}c_{sj} \right) \\ &= \left(\sum_{s=1}^n a_{is}b_{sj} \right) + \left(\sum_{s=1}^n a_{is}c_{sj} \right) = AB + AC \end{aligned}$$

ただし A は (m, n) 行列, B, C は (n, p) 行列として計算した。

(7)

$$\begin{aligned} (A+B)C &= ((a_{ij}) + (b_{ij}))(c_{ij}) = (a_{ij} + b_{ij})(c_{ij}) \\ &= \left(\sum_{s=1}^n (a_{is} + b_{is})c_{sj} \right) = \left(\sum_{s=1}^n a_{is}c_{sj} + \sum_{s=1}^n b_{is}c_{sj} \right) \\ &= \left(\sum_{s=1}^n a_{is}c_{sj} \right) + \left(\sum_{s=1}^n b_{is}c_{sj} \right) = AC + BC \end{aligned}$$

ただし A, B は (m, n) 行列, C は (n, p) 行列として計算した。

(2) 転置行列の定義に用いる B と一般の n 次行列の B がまぎらわしいですね。すいません。転置行列の定義に出てくる $B = (b_{ij})$ は $b_{ij} = a_{ji}$ という関係があるが, $(AB)^T = B^T A^T$ の $B = (b_{ij})$ は a_{ij} と関係がないとを考えてください。 A, B は n 次行列とする。 $AB = (c_{ij})$ とおくと, $c_{ij} = \sum_{s=1}^n a_{is} b_{sj}$

である。よって $(AB)^T$ の (i, j) 成分は $c_{ji} = \sum_{s=1}^n a_{js} b_{si}$ である。 $A^T = (a_{ji}), B^T = (b_{ji})$ なので $B^T A^T$ の (i, j) 成分は

$$\sum_{s=1}^n b_{si} a_{js} = \sum_{s=1}^n a_{js} b_{is} = c_{ij}$$

である。よって $(AB)^T = B^T A^T$ となる。

(3) $j - i = k$ のとき $a_{ij}^{(k)} = 1$, $j - i \neq k$ のとき $a_{ij}^{(k)} = 0$ と定義し, $A(k) = (a_{ij}^{(k)})$ と定義する。この問題の A は $A = A(1)$ となっている。

具体例を幾つか計算することにより $A(k)A(\ell) = A(k + \ell)$ が予想されるので, これを証明する。

$A(k)A(\ell)$ の (i, j) 成分を b_{ij} とすると, $b_{ij} = \sum_{s=1}^n a_{is}^{(k)} a_{sj}^{(\ell)}$ となる。 $a_{is}^{(k)}$ は $s - i = k$ となる時のみ 1 で, それ以外は 0 なので $b_{ij} = a_{i+i+k}^{(k)} a_{i+kj}^{(\ell)} = a_{i+kj}^{(\ell)}$ となる。 $a_{i+kj}^{(\ell)}$ は $j - (i + k) = \ell$ のとき 1, それ以外は 0 なので, b_{ij} は $j - i = k + \ell$ のとき 1, $j - i \neq k + \ell$ のとき 0 となる。よって $b_{ij} = a_{ij}^{(k+\ell)}$ となる。以上で $A(k)A(\ell) = A(k + \ell)$ が示された。

$A^2 = A(1)A(1) = A(1 + 1) = A(2)$ が成立する。帰納的に $A^m = A(m)$ が証明できる (各自数学的帰納法で証明せよ)。 $m \geq n$ のとき $A(m) = O$ (零行列) なので $A^n = A(n) = O$ が成立する。

(4) 具体例で幾つか計算すると $A^2 = E$ が予想されるのでこれを証明する。

$A = (a_{ij})$ とおくと $i + j = n$ のとき $a_{ij} = 1$, $i + j \neq n$ のとき $a_{ij} = 0$ が成立している。 $A^2 = (b_{ij})$ とおくと $b_{ij} = \sum_{s=1}^n a_{is} a_{sj}$ であるが, $i + s = n$ のとき $a_{is} = 1$, $i + s \neq n$ のとき $a_{is} = 0$ なので, $b_{ij} = a_{i, n-i} a_{n-i, j} = a_{n-i, j}$ となる。 $(n - i) + j = n$ のとき, 即ち $i = j$ のとき $a_{n-i, j} = 1$ であり, $(n - i) + j \neq n$ のとき, 即ち $i \neq j$ のとき $a_{n-i, j} = 0$ なので $b_{ij} = \delta_{ij}$ となり (ここで δ_{ij} はクロネッカーのデルタ) $A^2 = E$ となる。

よって A^n は n が偶数のときは E , 奇数のときは A となる。

(5) 行列 $A = (a_{ij})$ が $j - i < k$ のとき $a_{ij} = 0$ となっているとき, その行列をタイプ k と呼ぶことにする。具体例で計算すると, タイプ k の行列とタイプ ℓ の行列の積はタイプ $k + \ell$ の行列になっていると予想されるのでこれを証明する。 $A = (a_{ij})$ をタイプ k の行列, $B = (b_{ij})$ をタイプ ℓ の行列とし, $AB = (c_{ij})$ とする。 $c_{ij} = \sum_{s=1}^n a_{is} b_{sj}$ であるが, $s - i < k$ のとき $a_{is} = 0$ なので, 和は $s - i \geq k$ となる s に関してのみとればよい。同様に $j - s < \ell$ のとき $b_{sj} = 0$ なので, 和は $j - s \geq \ell$ となる s に関してとればよい。よって $c_{ij} = \sum_{k+i \leq s \leq j-\ell} a_{is} b_{sj}$ となる。 $j - s < k + \ell$ のとき条件を満たす s は存在しないので $c_{ij} = 0$ となる。よって AB はタイプ $k + \ell$ である。

A はタイプ 1 なので A^2 はタイプ 2 である。帰納的に A^m はタイプ m であることが証明される (各自数学的帰納法で証明すること)。 $m \geq n$ のときタイプ m の行列は O (零行列) のみなので $A^n = O$ が成立する。

演習問題 2.24 次の形の行列が正則であるための必要十分条件を求めよ。

$$A = \begin{pmatrix} a & b & c \\ 0 & d & e \\ 0 & 0 & f \end{pmatrix}$$

また逆行列を求めよ。

A が逆行列 $B = (b_{ij})$ を持つと仮定すると $AB = E$ が成立している。 AB の $(1, 1)$ 成分は ab_{11} であり、 E の $(1, 1)$ 成分は 1 である。よって $ab_{11} = 1$ が成立している。 $a = 0$ ならこのような b_{11} は存在しないので $a \neq 0$ である。同様に $(2, 2)$ 成分を比較することにより $d \neq 0$ が、 $(3, 3)$ 成分を比較することにより $f \neq 0$ が分かる。

逆に $a \neq 0, d \neq 0, f \neq 0$ のとき、 $B = (b_{ij})$ とおき連立 1 次方程式 $AB = E$ を解くと、 $B = \begin{pmatrix} \frac{1}{a} & -\frac{b}{ad} & \frac{be - cd}{adf} \\ 0 & \frac{1}{d} & -\frac{e}{df} \\ 0 & 0 & \frac{1}{f} \end{pmatrix}$ が得られる。よって逆行列を持つ必要十分条件は $a \neq 0$ かつ $d \neq 0$ かつ $f \neq 0$ であり、逆行列は上述のものとなる。

演習問題 2.25 次の形の行列が正則であるための必要十分条件を求めよ。

$$A = \begin{pmatrix} a & 1 & x & y \\ 0 & b & 1 & z \\ 0 & 0 & c & 1 \\ 0 & 0 & 0 & d \end{pmatrix}$$

また正則のとき逆行列を求めよ。

前問と同様に考えれば、逆行列を持つ必要十分条件は、 $a \neq 0$ かつ $b \neq 0$ かつ $c \neq 0$ かつ $d \neq 0$ であり、逆行列は

$$B = \begin{pmatrix} \frac{1}{f} & -\frac{1}{ab} & \frac{1 - bx}{abc} & \frac{-1 + cz + bx - bcy}{abcd} \\ 0 & \frac{1}{b} & -\frac{1}{bc} & \frac{1 - cz}{bcd} \\ 0 & 0 & \frac{1}{c} & -\frac{1}{cd} \\ 0 & 0 & 0 & \frac{1}{d} \end{pmatrix}$$

となる。

演習問題 2.26 A が正則のとき A^T も正則であり, $(A^T)^{-1} = (A^{-1})^T$ を示せ。

A の逆行列を B とすると $AB = BA = E$ が成立している。3 辺の転置行列をとると演習問題 2.23 (2) より $(AB)^T = B^T A^T$ および $(BA)^T = A^T B^T$ が成立している。 $E^T = E$ であることに注意すれば, $B^T A^T = A^T B^T = E$ が成立する。この等式は A^T の逆行列が B^T であることを示している。即ち $(A^T)^{-1} = (A^{-1})^T$ が成立する。

演習問題 2.27 定理 2.32 を証明せよ。

(1) \implies (2) : $|\mathbf{x} + \mathbf{y}|^2 = (\mathbf{x} + \mathbf{y}, \mathbf{x} + \mathbf{y}) = (\mathbf{x}, \mathbf{x}) + 2(\mathbf{x}, \mathbf{y}) + (\mathbf{y}, \mathbf{y}) = |\mathbf{x}|^2 + 2(\mathbf{x}, \mathbf{y}) + |\mathbf{y}|^2$ 及び $|T_A(\mathbf{x} + \mathbf{y})|^2 = |T_A(\mathbf{x}) + T_A(\mathbf{y})|^2 = (T_A(\mathbf{x}) + T_A(\mathbf{y}), T_A(\mathbf{x}) + T_A(\mathbf{y})) = |T_A(\mathbf{x})|^2 + 2(T_A(\mathbf{x}), T_A(\mathbf{y})) + |T_A(\mathbf{y})|^2$ は常に成立している。(1) を仮定すると, 任意のベクトル \mathbf{x}, \mathbf{y} に対し $|T_A(\mathbf{x} + \mathbf{y})| = |\mathbf{x} + \mathbf{y}|$ 及び $|T_A(\mathbf{x})| = |\mathbf{x}|, |T_A(\mathbf{y})| = |\mathbf{y}|$ が成立しているので, $|T_A(\mathbf{x})|^2 + 2(T_A(\mathbf{x}), T_A(\mathbf{y})) + |T_A(\mathbf{y})|^2 = |T_A(\mathbf{x} + \mathbf{y})|^2 = |\mathbf{x} + \mathbf{y}|^2 = |\mathbf{x}|^2 + 2(\mathbf{x}, \mathbf{y}) + |\mathbf{y}|^2$ より $(T_A(\mathbf{x}), T_A(\mathbf{y})) = (\mathbf{x}, \mathbf{y})$ が分かる。

上の証明は定理 2.28 の証明の対応部分をコピーしたものである。この様に, 成分表示によらない場合は次元によらず証明できる場合がある。

(2) \implies (3) : $\mathbf{e}_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}, \mathbf{e}_2 = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}, \mathbf{e}_3 = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$ とおくと, $\mathbf{a}_1 = T_A(\mathbf{e}_1), \mathbf{a}_2 = T_A(\mathbf{e}_2), \mathbf{a}_3 =$

$T_A(\mathbf{e}_3)$ が成立している。よって $|\mathbf{a}_1|^2 = (\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_1) = (T_A(\mathbf{e}_1), T_A(\mathbf{e}_1)) = (\mathbf{e}_1, \mathbf{e}_1) = 1, |\mathbf{a}_2|^2 = (\mathbf{a}_2, \mathbf{a}_2) = (T_A(\mathbf{e}_2), T_A(\mathbf{e}_2)) = (\mathbf{e}_2, \mathbf{e}_2) = 1, |\mathbf{a}_3|^2 = (\mathbf{a}_3, \mathbf{a}_3) = (T_A(\mathbf{e}_3), T_A(\mathbf{e}_3)) = (\mathbf{e}_3, \mathbf{e}_3) = 1,$
 $(\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2) = (T_A(\mathbf{e}_1), T_A(\mathbf{e}_2)) = (\mathbf{e}_1, \mathbf{e}_2) = 0, (\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_3) = (T_A(\mathbf{e}_1), T_A(\mathbf{e}_3)) = (\mathbf{e}_1, \mathbf{e}_3) = 0,$
 $(\mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3) = (T_A(\mathbf{e}_2), T_A(\mathbf{e}_3)) = (\mathbf{e}_2, \mathbf{e}_3) = 0,$ が成立する事が分かる。

(3) \implies (5) :

$$\begin{aligned} A^T A &= \begin{pmatrix} a_{11} & a_{21} & a_{31} \\ a_{12} & a_{22} & a_{32} \\ a_{13} & a_{23} & a_{33} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} a_{11} & a_{12} & a_{13} \\ a_{21} & a_{22} & a_{23} \\ a_{31} & a_{32} & a_{33} \end{pmatrix} \\ &= \begin{pmatrix} a_{11}a_{11} + a_{21}a_{21} + a_{31}a_{31} & a_{11}a_{12} + a_{21}a_{22} + a_{31}a_{32} & a_{11}a_{13} + a_{21}a_{23} + a_{31}a_{33} \\ a_{12}a_{11} + a_{22}a_{21} + a_{32}a_{31} & a_{12}a_{12} + a_{22}a_{22} + a_{32}a_{32} & a_{12}a_{13} + a_{22}a_{23} + a_{32}a_{33} \\ a_{13}a_{11} + a_{23}a_{21} + a_{33}a_{31} & a_{13}a_{12} + a_{23}a_{22} + a_{33}a_{32} & a_{13}a_{13} + a_{23}a_{23} + a_{33}a_{33} \end{pmatrix} \\ &= \begin{pmatrix} (\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_1) & (\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2) & (\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_3) \\ (\mathbf{a}_2, \mathbf{a}_1) & (\mathbf{a}_2, \mathbf{a}_2) & (\mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3) \\ (\mathbf{a}_3, \mathbf{a}_1) & (\mathbf{a}_3, \mathbf{a}_2) & (\mathbf{a}_3, \mathbf{a}_3) \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{pmatrix} \end{aligned}$$

となる。

別解 : ベクトルを行列とみなせば, \mathbf{a}, \mathbf{b} の内積は $(\mathbf{a}, \mathbf{b}) = \mathbf{a}^T \mathbf{b}$ となっている。ただしここで 1 行 1 列の行列とスカラーを同一視している。 $A = (\mathbf{a}_1 \ \mathbf{a}_2 \ \mathbf{a}_3)$ なので $A^T = \begin{pmatrix} \mathbf{a}_1^T \\ \mathbf{a}_2^T \\ \mathbf{a}_3^T \end{pmatrix}$ となって

いる。

$$A^T A = \begin{pmatrix} \mathbf{a}_1^T \\ \mathbf{a}_2^T \\ \mathbf{a}_3^T \end{pmatrix} (\mathbf{a}_1 \ \mathbf{a}_2 \ \mathbf{a}_3) = \begin{pmatrix} (\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_1) & (\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2) & (\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_3) \\ (\mathbf{a}_2, \mathbf{a}_1) & (\mathbf{a}_2, \mathbf{a}_2) & (\mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3) \\ (\mathbf{a}_3, \mathbf{a}_1) & (\mathbf{a}_3, \mathbf{a}_2) & (\mathbf{a}_3, \mathbf{a}_3) \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{pmatrix}$$

となる。

$$(5) \implies (1) : A^T A = \begin{pmatrix} (\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_1) & (\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2) & (\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_3) \\ (\mathbf{a}_2, \mathbf{a}_1) & (\mathbf{a}_2, \mathbf{a}_2) & (\mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3) \\ (\mathbf{a}_3, \mathbf{a}_1) & (\mathbf{a}_3, \mathbf{a}_2) & (\mathbf{a}_3, \mathbf{a}_3) \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{pmatrix} \text{が成立している。 } \mathbf{x} =$$

$$\begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix} \text{ に対し,}$$

$$T_A(\mathbf{x}) = \begin{pmatrix} a_{11}x_1 + a_{12}x_2 + a_{13}x_3 \\ a_{21}x_1 + a_{22}x_2 + a_{23}x_3 \\ a_{31}x_1 + a_{32}x_2 + a_{33}x_3 \end{pmatrix} = x_1 \begin{pmatrix} a_{11} \\ a_{21} \\ a_{31} \end{pmatrix} + x_2 \begin{pmatrix} a_{12} \\ a_{22} \\ a_{32} \end{pmatrix} + x_3 \begin{pmatrix} a_{13} \\ a_{23} \\ a_{33} \end{pmatrix}$$

なので

$$\begin{aligned} |T_A(\mathbf{x})|^2 &= (T_A(\mathbf{x}), T_A(\mathbf{x})) \\ &= (x_1 \mathbf{a}_1 + x_2 \mathbf{a}_2 + x_3 \mathbf{a}_3, x_1 \mathbf{a}_1 + x_2 \mathbf{a}_2 + x_3 \mathbf{a}_3) \\ &= x_1^2 (\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_1) + x_2^2 (\mathbf{a}_2, \mathbf{a}_2) + x_3^2 (\mathbf{a}_3, \mathbf{a}_3) \\ &\quad + 2x_1 x_2 (\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2) + 2x_1 x_3 (\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_3) + 2x_2 x_3 (\mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3) \\ &= x_1^2 + x_2^2 + x_3^2 = |\mathbf{x}|^2 \end{aligned}$$

となり, (1) が成立する。